

(1) 特筆すべき教育活動の取組と成果（大学教育改革の支援プログラム（GP等）の採択状況と取組、グローバルCOE等の大型プロジェクトの採択・実施状況などを含む。）

○文部科学省による「教育関係共同利用拠点」の認定

文部科学省が平成 21 年度に新たに創設した「教育関係共同利用拠点」制度において当センターが掲げる「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」が FD・SD の中核拠点として平成 22 年 3 月に認定を受けた。

平成 22 年 4 月には当センター内に大学教育支援センターを設置して他大学からの共同利用に対応する体制を構築し、6 月には拠点発足シンポジウム、8 月には国際シンポジウムを開催した。なお、FD・SD の共同利用拠点の認定は、本学に加えて名古屋大学、京都大学、愛媛大学の全国で 4 大学である。

○文部科学省特別経費事業（平成 22 年度から 5 年間の事業）

平成 21 年度に「国際連携を活用した世界水準の大学教員養成プログラム（PFFP）の開発」プロジェクトの概算要求を行い、平成 22 年度から文部科学省特別経費による 5 年計画の事業として採択された。このプロジェクトは、大学院生など将来の大学教員候補生を対象に、海外インターンシップ、国内インターンシップを含めた大学教員養成プログラム（Preparing Future Faculty Program）を開発・実施し、日本の大学のモデル事業として期待されるものである。

1. 高等教育フォーラム開催による継続的な高大接続事業

高校教諭参加の高大接続を目指す第 12 回高等教育フォーラム「良質な大学入試問題の条件－テストの理論と現場の工夫－」を開催し、高校関係者 120 名を含む 207 名の参加があった。

また、第 8・10・12 回高等教育フォーラムを整理・再構成し『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』（高等教育開発推進センター・高等教育ライブラリ 2）として刊行した。

2. 高大接続事業のアウトリーチプログラムの継続的な開催

三沢市公会堂において東北大学高等教育開発推進センターアウトリーチプログラム（4）「コミュニケーションって何だろう？」を開催し、青森県内 4 校の公立高校の高校生、保護者、教員 1,112 名の参加があった。

3. 入試広報活動の展開

入試センターを中心に、①「大学案内」の企画、作成、②各種説明会（高校生対象の「進学説明会」6 月札幌会場 330 名参加、7 月東京会場 722 名参加、大阪会場 7 月 218 名参加。教員対象の「入試説明会」5～7 月、17 会場、456 名参加、うち仙台会場 189 名。高校訪問 29 校、等）、③オープンキャンパスの全学的な企画・調整・支援（7 月、参加者 51,766 名）等を実施。こうした活動に対し、『大学ランキング 2011』（朝日新聞社）では高校からの評価「広報活動に熱心」という項目で前年に引き続き第 2 位にランクされた。

4. 英語カリキュラムにおける TOEFL-ITP 実施と初修外国語履修に関するアンケート実施
 本学における英語教育強化のために、新たな英語カリキュラムが平成 21 年度から実施されており、全学部 1 年生を対象にした TOEFL-ITP 受験実施において中心的役割を果たした。
 また、本学の 1、2 年生の初修外国語履修者を対象に、「初修外国語」学習者の学習状況・学習ニーズに関する基礎調査を実施した。初修外国語に関する学習者の意見を収集することは、大学教員の教育方法改善にとって有意義であるだけでなく、教養課程における外国語教育の在り方にとっても貴重な資料となる。
5. 理科実験の「出席・成績管理システム」を用いた学生支援
 自然科学総合実験で用いている「出席・成績管理システム」で得られた学生の出欠情報をもとに、学務審議会を通して学部へ発信し、学生のドロップアウトを事前に予防する学生支援を行うシステムを継続的に実施している。
 また、自然科学総合実験において独自に行っているアンケート調査の内容を改訂し、継続的に実施している。
6. 教育の起源と展開に関する多彩な人文社会科学研究
 日本西アジア考古学会と共催で、「西アジアにおける教育の起源と展開」（日時：2011 年 1 月 29 日（土）、場所：東北大学）を開催した。学校教育だけでなく、社会における水平そして特に垂直方向の様々な情報の伝達という広い意味で教育を捉え、このような「教育」が先史・古代の西アジアで生まれ発展した過程、そして古代における教育のひとつの結実としての古代ギリシア教育を、現代をも念頭に置き解き明かした。
 また、全学教育は幅広い視野を備え次代を担う人材を育成する役割を負うが、そのためにもアジアの歴史と文化に深い理解を持つことが不可欠との考えから、韓国併合 1 世紀を迎えた今、「植民地時代の文化と教育」を問い直す研究プロジェクトに取り組んでいる。教育史・日本史・思想史・文学など多分野の研究者が従事している。昨年度は、東北大学高等教育国際セミナーとして、「植民地時代の文化と教育-韓国併合 1 世紀を経て-」（日時：2011 年 1 月 22 日（土）、場所：東北大学）を開催した。
7. 「アドバンスト・マスマティクスコース」等の継続的な開講
 東北大学の「出る杭を伸ばす」施策である学部の初期段階（2～3 セメスター）における課外授業として「アドバンスト・マスマティクスコース」を、学部生及び大学院生を対象とした課外授業として「プラクティカル・イングリッシュコース」を引き続き開設し、学生の勉学意欲の向上を実現した。
8. 日本人学生と留学生の共修授業を実施
 前年度に引き続き、東北大学の教育の国際化、学生の国際理解教育を目標として、日本人学生と留学生の共修授業を開設した。全学教育「カレント・トピックス」の授業 6 科目を「外国人留学生等特別課程」の日本語・日本文化演習授業 11 科目と組み合わせる形で「国際共修ゼミ」として開講した。受講者は述べ 257 名（うち日本人学生 87 名）であった。
9. 全学生を対象としたキャリア支援プログラムの企画・実施
 現在の社会環境および学生のニーズを踏まえ、キャリアデザイン方法、コミュニケーション力などの習得を目的とした支援プログラムを年間通じて実施している。延べ 12,000 名ほどの学生が参加した。

10. 学生相談所による継続的な予防教育的活動

本学学生の修学上・学生生活上の問題の発生防止、それらに関する悩みの早期発見・早期対応を目的とし、学生および教職員を対象とした予防教育的活動を実施した。教職員に対しては、ハラスメント・自殺防止等に関する学生支援審議会 FD（4回）、ハラスメント・学生対応等に関する部局 FD や全学 SD 等を行い、学生に対しては、各部局におけるガイダンスや研修会においてハラスメントやメンタルヘルス等に関する講演を実施した。

11. 保健管理センターにおける継続的な保健衛生活動

定期健康診断や特殊健康診断等の健診業務および日常の健康相談を通じて、本学学生の保健衛生に関する認識を高め健康的なキャンパスライフの創設に寄与した。特に今年度は新型コロナウイルスの第2波パンデミックが懸念されたため感染拡大防止のための啓発活動を継続的に実施した。

12. アカデミック・ライティング教育の実施

前年度他大学教員と共同で開発・刊行した『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（東京大学出版会）を活用し、留学生を主対象とする研究スキル養成の授業で日本語によるアカデミック・ライティングの指導を実施した。

13. 教員研修（「ランチタイムFD」）の企画・実施

本学教員の研究・教育の交流などを目的としたFD研究会を企画・実施。昨年度はランチタイムFDを8回開催。「講義型授業でいかに学生の主体性を育むか」「Teaching students how to communicate in English」など。

(2) 特筆すべき研究・診療活動の取組と成果

1. 『高等教育ライブラリ』シリーズの刊行開始

当センターにおける高等教育研究の成果を広く社会に発信するため、東北大学出版会から高等教育ライブラリのシリーズを刊行することとした。平成22年度にはその第1～2巻としてライブラリ1『教育・学習過程の検証と大学教育改革』、ライブラリ2『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』を刊行した。

2. 東北大学の入試改善に関わる研究

東北大学の入試改善に資するため、①追跡調査に関わる研究、②新指導要領に対応する平成27年度入試の検討、③看護系大学の入試設計に関する研究、④新型コロナウイルス対策の検証を実施し、その成果をセンター紀要や本センター発行の報告書および全国大学入学者選抜研究連絡協議会や学会等において公表した。

また平成23年2月京都大学等で起きた携帯メールによる不正受験を機に、急遽入試実施委員会および入試センターにおいて本学における携帯電話等の取扱いを検討。携帯電話を封筒に入れるなどの厳格な措置を決定し、後期日程試験以降適用することにした。

さらに、一般入試後期日程試験合格者における入学未手続き者へのアンケートを実施し、震災との影響について、集計・分析中である。

3. 学務審議会・東北大学院生調査の実施協力

学務審議会に設置された「大学院教育のあり方に関するワーキング」の調査活動に協力し、東北大学では初めての院生調査用紙の企画・設計を行い、分析結果を報告書にまとめた。報告書に基づいて、学務審議会では、引き続き大学院教育の改善について取り組むなど、東北大学の教育改善に貢献している。

4. 理科実験科目を通じた教育連携研究

様々な大学における理科実験科目について、内容、実施システムや方法、科目の位置づけ等を調査・訪問し、教育における連携活動を行ってきた。その一貫として平成22年度は自然科学総合実験の授業公開を行い、他大学教員に東北大学の活動を理解していただくとともに、情報交換を行った。

5. 理科実験における「出席・成績管理システム」の更新と新システムの開発

以前に開発した出席・成績管理システムを用いてきめ細かな学生支援を行ってきたが、ハード・ソフトともに老朽化してきたために、平成23年度に向けて新たなシステム「出席・成績情報システム」の構築を開始した。このシステムではG30のシステムにも対応できるようにする。

6. オン・ライン CALL 教材の開発

インターネットを活用した英語教材はこれからの英語教育の新しい学習法として、質・量の両面で充実させていく必要がある。本センター英語教員がモンタナ大学、スタンフォード大学と共同で制作・開発したオン・ライン CALL 教材 **Linc English** は、既に本学および日本の数大学で使用されており、さらに「話す・書く」アウトプットの教材開発の研究と調査を進めている。

7. 学生健診時尿検体から得られる生活習慣病マーカーに関する研究

多くの学生を対象とする保健管理センターの特長を生かした研究として、定期健康診断時の尿検体における新しい生体情報である酸化ストレスマーカーであるチオバルビツール酸反応性物質やカルボニルストレスであるメチルグリオキサールに関する検討を行った。今年度は肥満学生では高血圧合併が多く、酸化ストレスやカルボニルストレスが大きい事を明らかにすることができた。さらに尿検体の酸化ストレスやカルボニルストレスの測定は生活習慣病の早期診断に有用であることが示された。

8. 大学における発達障害学生の修学支援体制構築に関する研究

大学の教育研究において問題となってきた高機能発達障害学生について、その実状と対応を学術的に把握するため、教育学研究科との共同研究を前年度に引き続き行った。特に研究中心大学における発達障害学生の支援体制構築の研究に取り組んでおり、その成果を「『発達障害学生修学支援体制の構築』に関する研究報告書(発達障害学生修学支援研究会)」としてまとめると同時に、教職員を対象とした「発達障害学生とのかかわりガイドブック」を作成した。

9. 論文の構造に関する分野横断的研究

留学生を主対象とする日本語論文の読解・作成の指導のため、人文科学・社会科学・工学の3領域の主な研究分野の論文を収集し、その構成の異同を明らかにした。

10. ウズベキスタン共和国学術アカデミー考古学賞の受賞

平成23年6月15日に、当センターの芳賀 満教授が、その学術的貢献に対して、ウズベキスタン共和国学術アカデミー総裁から平山郁夫考古学賞を授与された。

この賞はシルクロードの文化と文化財に多大な貢献をした平山郁夫氏の名を冠したもので、同国学術アカデミーからシルクロードに関して優れた業績を上げた国際的な研究者に対して授与されるものである。

(3) 特筆すべき社会貢献、国際化等の活動の取組と成果

1. 当センターが掲げる「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」が FD・SD の中核拠点として教育関係共同利用拠点に平成 22 年 3 月、認定を受け、東北地域高等教育コンソーシアム会議、拠点発足シンポジウム開催等を通して、各大学の教育力向上に寄与する中軸的な拠点センターとしての活動を開始した。
2. 東北地区国公立大学との継続的な連携事業
東北地区国公立大学との連携のもとに、平成 22 年度 IDE 大学セミナーとして第 12 回高等教育フォーラム「発達障害学生に対する学習・キャリア支援—大学と社会の連携—」を開催し、90 名の参加があった。
3. 高大連携事業「コスモス理科実験講座」の継続的実施
宮城第一高等学校と継続的に連携し、平成 22 年度は「県立学校における原子力・エネルギーに関する教育支援事業」を通して「コスモス理科実験講座」を開催し、高校と大学の教育的接続の事業を展開した。
4. 全国の大学のハラスメント相談員対象研修会の企画・開催
大学におけるハラスメント相談が増加し、ハラスメント相談員に高い専門性が求められる現状に対応するため、全国の大学のハラスメント相談員を対象とした本格的研修会を昨年度に引き続き、企画・開催した。
5. 全国及び地域に根ざした学生生活支援事業への多彩な貢献
学生相談室の吉武教授が、日本学生支援機構の「学生生活支援事業のあり方に関する有識者会議」有識者委員・主査となり、全国の学生生活支援事業のあり方について中心的役割を担っている。また、学生相談室相談員が中心となって仙台学生相談事例研究会を開催し、地域の大学のカウンセラー研鑽の機会を設けている。
6. 健康科学セミナー・健康科学講演会の開催
本学の保健管理センタースタッフのみならず近隣の大学の保健管理室勤務のスタッフを対象にしたセミナーを 4 回実施した。また、本学の学生、職員を対象に平成 22 年度は「ウエイトコントロールの食事学」の講演会を実施した。
7. The 24th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC) の開催
本センターを主催校として、第 24 回国際会議 PACLIC が平成 22 年 11 月に開催された。Workshop と本会議を通じて、外国語習得・言語学・情報科学の研究成果およびその外国語教育への応用に関する発表が行われ、本学全学教育における外国語教育にとって非常に有意義であった。
8. 大学の国際化のための講演会の実施
大学教員養成プログラムのための授業開発経費により、大学の国際化を目的として、日本語教育や多文化コミュニケーションに関する公開講演会を 3 回にわたって開催した。
9. 全国の国立大学の日本語教育研究協議会の企画・開催
日本語研修室の教員が国立大学日本語教育研究協議会のプログラム担当理事として平成 22 年 5 月に行なわれた第 25 回協議会企画・開催の中心的な役割を果たした。日本語教育政策についての講演と「大学の国際化戦略と日本語教育」という統一テーマでの討論を企画・実施した。討論では参加者が事前に報告メモを準備する方式を導入し、活発な情報交換・意見交換が行なわれた。

(4) その他、特筆すべき活動等の取組と成果

--